

令和 6 年度 学校評価書

1 今年度の学校の重点的な取組

(1) **確かな学力の定着** <重点課題①>

- ① 学校経営方針の実現に向けて
 - ◆ 学校経営方針（計画）実現のための自己申告書・学校評価書の作成。
- ② 授業力向上を行うための授業改善
 - ◆ 授業改善推進プランを児童の実態を基に作成し推進。
- ③ 個に応じた指導（習熟度別少人数指導・スクールアシスタントティーチャーを活用した指導等）
 - ◆ 1 年～2 年……算数：習熟度別少人数指導（講師）
 - ◆ 3 年～6 年……算数：習熟度別少人数指導（加配教員）
 - ◆ スクールアシスタントティーチャー、学習ボランティア等による授業内個別指導の実施。
- ④ 朝学習の充実と放課後学習、サマースクールの実施
 - ◆ 朝学習による基礎学力定着への取組。
 - ◆ 月 1 回の放課後学習教室の実施。
 - ◆ ふっさっ子の広場と連携した放課後学習の実施。（毎週火曜日・木曜日の放課後）
- ⑤ 学習基盤の充実……時間を守ること・学習ルールの徹底
 - ◆ チャイム授業開始。開始・終了の挨拶の徹底。
 - ◆ 話型の徹底。正しい言葉遣いの定着。
 - ◆ 詩の暗唱活動
- ⑥ **読書活動の充実** <重点課題②>
 - ◆ 図書ボランティア等の活用による読み聞かせの実施。
 - ◆ 読書旬間、朝読書、お勧め本紹介カードの作成・掲示。
 - ◆ 図書委員会による児童集会での全校児童への読書推進運動及び読み聞かせの実施。
 - ◆ 学校司書の積極的な活用。
- ⑦ 家庭学習の充実
 - ◆ 宿題による学びの日常化（ミライシードのドリルパーク）。
 - ◆ 長期休業中の宿題（ミライシードのドリルパーク）。
 - ◆ 家庭での 5 分間読書の推進。

(2) **豊かな心、豊かな人間関係の育成**

① 思いやりのある温かな学級・学校

基本的な生活習慣の確立と規範意識の定着 <重点課題③>

- ◆ 入室マニュアルを掲示し、保健室・職員室等への入室時の言葉遣いを指導。
 - ◆ 思いやりの心の育成や他者意識を高める内容を扱った講話。
 - ◆ 基本的な生活習慣等の定着。（時間を守る、忘れ物をしない、話をしっかり聞く、整理整頓をする等の取組）
 - ◆ 無言清掃週間の取組（学期に 1 回）。
- ② スタートカリキュラムの推進
 - ◆ スタートカリキュラムの確実な実施と授業開発の推進。
 - ③ 特別支援教育の充実
 - ◆ 個別支援計画の作成、通常学級における指導の充実。
 - ◆ 個々の児童のケースについての生活指導全体会の実施（学期 1 回以上）。

- ◆毎週金曜日の生活指導夕会による共通理解。
- ◆特別支援校内委員会を開き、個別のケースについて検討。

④特別活動との連携による人権教育の推進

- ◆代表委員会による一中との共同でのあいさつ運動。

⑤子供との心のふれあいを大切にした教育活動

- ◆地区班、異学年交流、副籍交流を通じた触れ合い活動。

⑥道徳授業の充実

- ◆全校児童及び保護者を対象とした道徳授業地区公開講座の実施。

⑦地域の伝統・文化理解教育の推進

- ◆和太鼓体験・発表、藍染め体験、茶道体験。

(3) 自ら体を鍛え 健康で元気な子

①豊かな心と健やかな体<重点課題④>

- ◆体力・運動能力の向上。

・持久走カードを活用した持久走旬間の実施。高学年による持久走大会を学校周回道路で実施。

- ◆縄跳びの取組。

・縄跳びカードの活用。長縄集会を目標とした縄跳び運動の取組の推進。

- ◆多様な運動への意欲を高める取組。

・3年生よりアルティメットを実施。

②健康教育・保健指導の充実

- ◆健康安全教育、指導の計画的実施「早寝、早起き、朝ご飯」の啓発。歯磨き指導の実施。

- ◆薬物乱用防止・禁煙教育の徹底。

③食育の推進

- ◆栄養教諭による食育の授業を全学級実施。健康管理できる能力の育成。

④キャリア教育の推進

- ◆清掃活動、ボランティア活動等を通じて勤労と奉仕の精神の育成。

(4) 研鑽する教師集団

①校内研究の充実

研究テーマ「自らの力で問題を解決できる児童の育成～読解力の向上を目指して～」

- ◆年間13回の校内研究（4回の研究授業と1回の講演を含む）を実施。

- ◆「読解力の向上」の実現に向けた授業改善について講師を招聘した講演会を1回実施。

②校内OJTの計画的推進

- ◆全教員参加による校内OJT研修の実施（年間10回実施）。

- ◆授業を公開し、全教員がいつでも授業を見合う雰囲気醸成。

- ◆全教員の特別支援教育の理解と実践の研修会の実施。

- ◆福教研での積極的研究活動の推進。

- ◆校外研修の充実。

- ◆藍染め研修。

(5) 保護者・地域・関係諸機関と連携

①学校評価（自己評価・学校関係者評価）の効果的な活用と結果説明

- ◆CS委員や保護者からの評価を生かした、学校運営と授業の改善。

②開かれた学校づくり

- ◆学校だよりや学年だより、ホームページやブログを通じた学校情報の発信。

- ◆服務規律の遵守。主任教諭を講師にしたミニ服務研修の実施。教育公務員としての責任の自覚。

- ◆CS委員会の開催による学校運営の向上。CS主催の藍染研修会の実施。

③地域との連携・融合

- ◆ふっさっ子の広場、学童保育との連携。
 - ◆PTA行事・地域行事への参加と交流の促進。
 - ◆小中一貫教育の推進。
 - ◆幼保小連携の推進。入学前見学と交流の実施。
 - ◆学校支援コーディネーターによる学校ボランティアの活用（芝生、学習、ミシン、九九検定等）。
- ④安心・安全な学校づくり
- ◆セーフティ教室、交通安全教室による被害・事故防止能力等の向上。
- ⑤特別支援教室（やまなみ教室）との連携と教育効果の向上
- ◆臨床発達心理士による巡回訪問での教員への指導・助言。
 - ◆担任のやまなみ授業参観の活性化。
- ⑥特別支援教育への組織的取組
- ◆個別支援計画や学校生活支援シートを作成し、個別支援の充実。
 - ◆家庭と子どもの支援員の活用。
 - ◆通常の学級における特別支援教育の推進。
 - ◆児童への特別支援理解教育の推進。
 - ◆ユニバーサルデザインを取り入れた指導法の推進。
- ⑦健康教育・食育・環境教育の推進（栄養教諭）
- ◆「早寝・早起き・朝ごはん」を保護者に啓発し、児童の生活リズムの確立。
 - ◆晴れた日の中休みや昼休みでの「校庭の遊び」を推進。

2 自己評価の総括

(1) 確かな学力の定着

学力調査の結果を見ると、各学年とも下位層（CD層）が半数にのぼる。その背景として、基礎学力が身に付いていないこと、一部の児童に授業規律が定着していないことが挙げられる。学力下位層の児童の中には、授業が分からないことから授業に向き合えない状況もあった。そこで、学力調査の結果に基づいて学力向上委員会が朝学習の問題を作成し取り組ませた。さらに、下位層の児童に対しては、補充として月1回の放課後学習教室を開催したが、つまずきの解消にはなったとは言えず、下位層の十分な引き上げまでには到らなかった。また、ドリルパーク等を活用した家庭学習は一定の効果があったが、未理解の学習内容について定着させるまでには到らなかった。「ふっさっ子スタンダード」を基にした授業規律の徹底と、児童への個別学習の機会を増やしていくことが必要である。加えて、ユニバーサルデザインの授業展開、学習環境の整備が急務である。

教員の授業改善については、個人差が見られた。ICT機器等の活用機会は向上しているが、授業力の向上とは結び付いていない。教職員にも基礎基本的な指導能力の獲得が求められる。また、教科学習に目は向いているが、総合的な学習の時間、特別活動等の指導力に不十分さが見られるため、これらの指導力向上にも努めていく必要がある。

読書活動については、「読書の習慣が身に付いている」と回答した児童が65%、保護者は50%と回答している。朝読書、読書旬間の読み聞かせや読書宿題の取組の成果が出ていないと考えられ、新たな対策が必要である。教員による読書指導の取組が形式的になっている面もあるため、今後、取組の工夫が必要である。

(2) 豊かな心、豊かな人間関係の育成

自己肯定感については、各学年とも87%の児童が肯定的な評価をしていた。また、子供たちのよさや頑張りを認めていると回答した保護者が90%であった。縦割り活動や各種行事等への児童の主体的な取組とともに、教員の児童を認め励ます指導の積み重ねの成果と思われる。

基本的な生活習慣については、多くの児童が身に付けている状況ではあるが、一部の児童に朝食を摂らずに登校したり、繰り返し遅刻する状況を改善できなかつたりすることも見られた。このよ

うな背景には、家庭の問題があると推察されるが、そうした家庭には、啓発の内容も届きにくい現状があった。

スタートカリキュラムの確実な実施により、不適応を起こす1年生はほとんど見られなかった。特に今年度は、1年生と近隣の幼稚園、保育園、こども園の園児で共同制作を行うなど新たな連携活動を行った。次年度も、幼保と連携した取組を推進していく。

和太鼓や藍染めの取組は本校の伝統となり、支援者の献身的な指導により成果を上げている。運動会や和太鼓クラブの発表において、その取組の成果を披露できたことは、児童の達成感につながった。今後も支援者との関係性を大切にしていきたい。

(3) 自ら体を鍛え 健康で元気な子

登校後、中休み、昼休みとも、多くの児童が校庭に出て体を動かしている。また、縄跳びの取組や持久走週間にも高学年が率先して取り組み、学校全体の士気を高めることにつながった。特に、持久走については、昨年、距離の見直しを行ったことで、意欲的に粘り強く努力する姿勢が育ってきている。3年生以上の児童については、アルティメットを体育の授業に取り入れ、体を動かしながら児童の関心や意欲を高めることにつながった。

また、来年度から正式実施をする「歯みがきタイム」に向けての試行では、児童の意識の変化も見られたので、これを契機に健康教育推進の橋頭保としたい。

(4) 研鑽する教師集団

校内研究として「自らの力で問題を解決できる児童の育成～読解力の向上を目指して～」を研究主題に、年間13回の校内研究（4回の研究授業）を、講師を招聘して行ったが、指導方法ばかりに目が向き、「どのような子供を育てたいか」という、最も重要な視点に欠けていた。目標がない中での研究は、成果や課題が明確にならず、研究としての学びは薄かったといわざるを得ない。若手が多い本校の教員にとっては、教科指導の基礎・基本を学ぶことは授業力を向上させる上で重要であるが、明確な目標を立てさせる指導が必要であった。教員の授業公開や授業参観も行われ、学び合う風土は高まっている。

(5) 保護者・地域・関係諸機関との連携

CS委員会を核として、学校経営に関する考えや各分掌の取組や成果・課題などの情報を提供し、協働して学校運営にあたることができた。学校支援コーディネーターによる、学習支援、交通安全支援等の学校ボランティア活動も定着している。特に今年は、学習ボランティアによるかけ算九九の検定を行った結果、検定の機会が増え、かけ算九九の定着の向上につながった。また、PTAからの寄贈本により学級図書の実を充実させることができた。しかしながら、学校評価保護者アンケートにおいて、「CSとしてPTAや地域との連携を積極的に行っている」では、20%近い保護者が「分からない」と回答している。対外的なアピールやさらに地域を巻き込んだ活動の計画が必要である。

児童の特別支援教育の充実のために、関係諸機関と積極的に連携を図り、指導の助言を受けるとともに、連携した取組を推進することができた。

3 自己評価に対する改善策

(1) 確かな学力の定着

①ユニバーサルデザインの授業の構築

教室環境や学習指導においてユニバーサルデザインの視点での改善を取り入れ、全校体制で実践していく。

②全校で共通した「ふっさっ子スタンダード」に基づく指導の徹底

学習規律の定着のために、基本的なルール「ふっさっ子スタンダード」を徹底する。

③組織的な対応を図った学力向上

学力向上委員会には、児童の実態に基づき、明確な目標を立てて指導に取り組ませる。その結果から成果と課題を綿密に分析させ、確実なPDCAサイクルの構築、実践をさせていく。

④朝学習の工夫と放課後学習教室の

児童の実態に即した内容の朝学習計画を立てて、全校で確実に取り組む。また、取組に対する結果を反映させた内容の変更などを随時行うようにし、児童の基礎学力の定着を図る。

⑤家庭学習の充実

音読、計算、漢字を計画的に毎日宿題として取り組ませる。また、ドリルパークを活用し、不得意分野の克服を図る。「学年×10分」を基本に、家庭学習の習慣化を定着させる。

⑥「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指した授業改善

児童の実態を基にした目指す児童像を明確にして、研究に取り組んでいく。

⑦生活集団の質の向上と学びの集団の育成

学級活動の指導を充実させ、学級集団の質の向上を図る。また、そうした良好な児童関係の集団を基盤として、認め合い、支え合う集団の育成を進め、安定した環境の中で学習に向き合えるようにする。

⑧詩の暗唱

年間を通して詩の暗唱に取り組ませ、詩の表現にふれて感受性を高めたり、語彙を増やしたりして、学力向上の補完的役割にする。

⑨読書活動の充実

引き続き、家庭における読書の習慣を付けるため、親子読書の取組を推進する。5分間読書の宿題に取り組ませ、児童がより読書に親しみ、本から知識を学ぶとともに語彙力を高め、言語能力の向上を目指す。年間「学年×10冊」の読書を目指し、週1日朝読書を行う。三小ブックリストを作成し、目標を立てて読書活動に取り組めるようにする。また、読書指導に関しては、学校図書館司書教諭を中心にOJTを行い、教員の指導力の向上を図る。また、図書ボランティア、図書館司書を活用し、読書旬間及び図書環境の充実を図る。

(2)豊かな心、豊かな人間関係の育成

①生活指導上のきまり「よい子の生活」の徹底

「よい子の生活」を年度当初から児童及び保護者に対して周知するとともに、全校で共通の指導が行われるように徹底する。

②基本的な生活習慣の確立のための家庭への働きかけの充実

基本的な生活習慣の必要性を、学校便りや保健便り等を通じて周知する。また、支援が必要な家庭等には、教員だけでなく家庭と子どもの支援員やSSW等の活用を積極的に図る。

③道徳的実践力、自己肯定感を育む「特別の教科 道徳」の授業改善

道徳の授業内容を自分事にするために、「考え・議論する」学習場面及び自己を振り返る場面を設ける。

(3)自ら体を鍛え 健康で元気な子

①児童の体力向上と運動意欲の向上

体力テスト、縄跳び週間の取組、持久走旬間・持久走大会等、様々な体育的活動の中で明確な目標をもち、その目標に向けて取組を進める活動を行う。また、体力テストの結果に基づく提案を体育委員会が行い、児童の体力の向上を図る。

②歯磨き指導をはじめとする健康教育の充実

給食後に歯磨きタイムを導入する。これを機に自身の健康へ目を向けさせるとともに、自立心を育む指導を保健領域で行う。

伝統・文化理解の教育の充実を図る。

(4)研鑽する教師集団

①校内研究の充実

校内研究の研究主題を、児童の実態に応じた内容に変更し、年間13回の校内研究（4回の研究授業）を実施し、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた教員の指導力向上を図る。

②OJT研修の充実

教員の力量向上に向けて、OJTの内容を充実させ、年間10回のOJT研修を実施する。

また、ベテラン教員と若手のペアでお互いが学び合える環境を整え、指導力の向上を図る。

(5) 保護者・地域・関係諸機関と連携

① C S 委員会の活動と学校支援活動の充実

C S 活動、学校支援活動の1年間の活動内容を明確にする。また、校務分掌の1つとして位置付けることで、C S 活動への教員の関わり方の明確化を図る。

② 幼保小連携、小中一貫教育の推進

幼稚園児、保育園児、こども園との交流を1年生だけでなく、新1年生の世話をする5年生にも実施し、新1年生の学校不適応を防ぐ。1年生、5年生には新1年生を迎え入れる気持ちを育てる。また、小中の連携としては、中学校区において、「義務教育修了段階の具体的な子供の姿」を検討し、重点指導内容をそろえ、小中一貫を視野に入れた教育の充実を図る。

③ 各種便りの発行による積極的な情報の発信

学年便りや学級便りに、児童の様子や学級担任の指導や考え方の発信に努める。そのことを通して、保護者・地域の学校への理解と信頼を高める。

4 学校関係者評価の総括 [学校評議員会協議内容]

(1) 第1回 学校評議委員会(令和6年4月30日)

- ① 学校経営方針の説明及び承認
- ② 組織及び役割分担の決定
- ③ 令和6年度予算説明
- ④ 意見交換

(2) 第2回 学校評議委員会(令和7年2月8日)

- ① これまでの学校経営について報告
- ② 各分掌よりこれまでの教育活動について報告
- ③ 学校評価総括
- ④ 学校関係者評価総括
- ⑤ 令和6年度学校経営方針(案)の説明
C S 委員会主催藍染研修開催

(3) 第3回 学校評議委員会(令和7年3月8日)

- ① 1年間の活動のまとめ及び次年度の活動について
- ② 意見交換

5 学校関係者評価に対する改善策

(1) 児童の学力向上に向けた取組の推進

- ① 基礎的・基本的な学力の定着のために、iPad 活用の一層の工夫を図る。
- ② 家庭学習の時間として「学年×10分」に取り組む。
- ③ C S 委員会主催の算数検定を継続する。
- ④ 年2回のPTA主催による漢字検定の実施と、学級文庫への寄贈本の取組を継続する。

(2) CS 委員会の活動について

- ① 研修部会では3月に、C S 委員・教職員・児童・保護者向けに SNS トラブルを防ぐための講演会を行った。広報部会ではC S だよりを刊行した。これらの活動が継続され、さらに活性化させるためにていくように、C S 委員の人事を見直し、組織の更新を図る。
- ② P T A 行事(漢字検定や友遊まつり)にC S 委員会も関わり連携を図っていく。
- ③ 学校支援地域組織(三小応援団)のボランティア・コーディネーターを中心に、学校支援体制が築かれている。新たなボランティアの呼びかけをしていく。

6 総括的な学校評価

(1)「よく考え やりぬく子」について(教育目標における今年度の重点項目)

全校的な学力の低さが課題ではあるが、以下の原因が考えられる。

- ・学習習慣が身に付いていない。
- ・保護者が子供の学習などに向き合えない家庭が、一定数存在する。
- ・教職員の向上意欲は自身の指導技術に向いており、児童の実態把握が貧弱なため、児童の実態と教師の指導・評価が釣り合わず、学習効果も指導効果もあがらない。
- ・学力向上を謳うが、プリントをやらせたり、補習を行ったりするだけで、その結果の分析が行われなため、成果や課題があったのかさえ把握できていない。
- ・成果と課題を把握しない中で、前年踏襲型で同じプリント学習などを続けているだけなので、学力向上委員会の計画は、児童の実態にそぐわないプリント学習予定表になっており、当然、学力の向上は見込めない。

対策

- ・教室環境や学習指導、児童への支援方法をユニバーサルデザインの視点で再度見直し、全ての児童にとって最適な学びとなるように改善をしていく。
- ・学力向上委員会主導で児童の実態把握を年度当初に綿密に行い、必要な力や向上させたい力を学校・学年・学級のそれぞれのレベルではっきりとさせて、全職員に共通認識を待たせる。
- ・家庭学習の習慣づけの啓発を学校便りなどで随時行う。
- ・担任は児童の実態に合わせた指導を行えるように、ICT機器の活用を充実させる。
- ・学力向上委員会の計画はPDCAサイクルを意識させてショートスパンで行い、その都度点検作業を行うことで、成果と課題に即した内容に随時変更していく。
- ・詩の暗唱や読書活動を常時活動として取り入れることで、児童の語彙の充実や、様々な表現にふれる機会を増やし、言語の素養向上を図る。

(2)「思いやりのある 心豊かな子」について

幼い感じはあるが、明るく素直な児童が多い。自己肯定感も高い児童が多く、今年度は大きな問題行動等も皆無に等しい状態だった。いじめも大きな案件はなかったが、児童の学校での居心地の良さをさらに向上させるために、以下の対策を来年度行う。

- ・アセス(学校適応感尺度)を学年始めと終わりの計2回取り、児童の学級での様子を数値化して表すことで、どの教員とも共通認識を取りやすくする。これにより児童の学級での困り感や集団からの孤立を未然に防ぐ資料とし、組織的対応ができる体制を敷く。
- ・学級活動を活性化させ、自主的な態度、自治的な活動を目指し、児童の主体性を向上させる。また、学級経営の安定を図る側面からも学級活動の重要性を全職員に指導し、特別活動の指導力の向上を目指す。
- ・全てのクラスで各学期の始めにいじめ防止授業を必ず1回を行い、児童の人権意識の向上を図る。
- ・「生活指導は未然防止が原則」を合言葉に教職員の意識改革をし、些細なことであっても、声をかけたり、相談したりすることが児童を守ることを指導していく。

(3)「進んで体をきたえ 健康な子」について

体力についての保護者アンケートも児童アンケートも75%前後が肯定的に捉えていたが、体力テストの結果を見ると体力的な向上は見られなかった。引き続き行事と絡めた体力向上案を立案、実践させていくとともに、年間を通じた体力向上を目指した取組を創っていくよう指導する。

歯磨き指導をはじめとした取組から、自身の健康へ目を向けさせ、日常の望ましい生活習慣を身に付けさせる指導や取組を導入する。